

# 保育と看護における援助概念に関する考察

伊藤 能之

A study of univaersality between a earaly childhood care and education and nursing

Yoshiyuki Itou

本論考の目的は、保育者が乳幼児を援助することと看護師が患者を看護することにおいて、それぞれにおいて相違点があるようにみえても、そこには共通の普遍的な考え方があることを明らかにする一方でその共通のアプローチの方法を理解し、看護理論を援助理論への理論的適用ができることを考えたものである。

保育、看護ともに実践の科学であり、現場重視の即応的対応を求めながらも、そこに現象学のような哲学的な概念が共通の基盤として存在することを明らかにしつつ、その適用の方法について考察した。

This study was connducted for leading to universalitey on carrinng of the relationship between a earaly childhood care and education and nursing.

Whatever the inpotannt differences are between a nursery teather for babies and little child nurse for his nurse.

Earaly childhood care and education and nursing are practical science and need a immidiate answer.

Univerasality on carrinng is to has a way of ordering his other values and activities around it. Uuniverasality on carrinng is remarkable on developping on theory by phenomenology.

## I. 序 論

本論文においては、保育と看護における援助概念について考察する。看護概念が、保育において適用できるという立場に立ち、まずは、看護概念を明らかにし、その上で、それがどのように保育において適用できるかを考察する。

また、その適用に関しては、現象学的アプローチを用いた。

## II. 本 論

### 第1章 看護における現象学

#### 1節 看護と哲学をつなぐもの

現象学的アプローチというのは看護の分野においては大きな方法となっている。しかし、このこと自体にも疑問が生じる。同じ実践の科学であるはずの看護が、なぜ抽象的な思考である哲学と結びついたのか。前節で述べたように極めて難解とされる現象学と結びついたのか、この点がまず疑問として起こる。

この問いに対する回答は、看護理論家の種々の著作より伺い知ることができる。<sup>(1)</sup> それは保育と同じ実践科学でありながら看護特有の事情にある。つまり、看護が人間の生死を扱う領域だからだ。出産を祝い、死を看取る。それ以外にも長期入院、回復が絶望とされる病魔。それぞれの患者は、たいへんな苦しみを体験する。子どもを授かるという至福の時と愛する人を失

うという悲しみの極地。交通事故など一瞬の不注意から人生の方向が劇的に変化する人、夢が消え、夢が生まれる。そのような空間が哲学とマッチしたのだと考えられる。そこには常に、人間の尊厳とは何か、生きるとは何か、死とは何か、という問いが存在した。そしてそのような問いの延長には、たとえば宗教的な問い、人間はどこから来て、どこに行くのだろうか、などという問いへ発展する可能性も多分にある。一方、哲学には生老病死という人間が避けて通ることができない重要な問題について常に考えてきた。多くの人間の生と死に直面している看護が、それらの問いに答えを求めたと考えられる。その典型はたとえば脳死の問題である。脳死の判定には医学はもちろん、あらゆる分野からの識者が集まり、哲学的、宗教的に論議され一応の答えを出した。しかし、その脳死判定には今日もまだ問題が多いとされる。<sup>(2)</sup>

このような関係性の中で、実践の科学である看護と抽象的概念を取り扱う哲学とが急接近したと考えられる。つまり、誰にも答えられない問い、すぐには答えられない問いと日々直面している看護がその答えを求めて哲学に接近したと考えられる。

ただ、もちろん、そこには急接近したとはいうもののズレも生じていたであろうことは想像に難くない。以下のような事例報告もある。この報告は看護師たちと勉強会をもった哲学者からの報告である。

何よりも思考のくせが違うのですね。看護の方は

時間を決めて、複数でディスカッションをして、たとえば看護の方針を現場で決めなくてはいけない。つまり即座に明確な、全員が了解できる結論を導かなければならないわけです。哲学者は正反対なのです。何かみんな納得できる回答が出てきたら、おかしいぞと思うんです。そんな単純にことがみえるはずがないと思うんです。いままでわかっていたと思ってきたことが当たり前でなくなる、自明だったものが問題としてみえてくるとむしろ、うれしくなるのです、「あ、また問題がみえた」と。答えを出さないといけないタイプの人たちと、問題を探ることが快感である人たちが一緒にやるわけですから、哲学者サイドの人たちが問題がみえたと思ったときは、看護学研究の方は「今日はいったい何を話し合ったのですか。私たちはいったいどういう結論を得たのでしょうか」とおっしゃる。そこでのコントラストは大きかったのですが、1年2年と続けるうちにお互いの価値が本当にわかってきて、自分たちが自明だと思っている態度がいかにいびつなものであるかを知らされました。ありがたい経験だったと思います。<sup>(3)</sup>

この哲学者の言葉は保育と哲学との関係にも適用しうるのである。

いつまでも幼稚園になじめず帰りたいと泣き叫ぶ子、大好きなお友達が引っ越してしまったために幼稚園に来なくなってしまう子、一見、楽しげに遊んでいるようでも、いつも犬の役をやらされ首に縄を付けられてしまったりする子。これは、まさにほんの一例である。これら日々直面する問題に対峙している現場の実践者である保育者にとって、その問いに答えをすぐに見いだしてくれない理論は否定の対象となり得るのである。

しかし、上記のような対立構造はあるものの、人間の生死に常に立ち会うという精神的にもつらい状況の中で看護が哲学に接近する可能性は確実にあると言える。

では、このような中で、看護は具体的にどのような形で哲学、ことに現象学と結びついているのか以下に検討する。

## 第2節 ベナーの看護理論

### 1. なぜ、パトリシア・ベナーか

本節では看護における現象学的アプローチの実践例としてベナーを検討対象とする。これは消極的理由と積極的理由の2つがある。

まず消極的理由から言えば、現象学はたいへんに拡散、離散しており、それぞれの研究者により解釈が異

なる。もちろん、これでは厳密な検討ができるはずもなく、現在、あまりにもふくれあがった現象学的アプローチに一定のルールを用いようとする動きはある。

しかしながら現時点においては、まだそのルールは確定しておらず、従って分析を進めるには、特定の理論家にそって分析検討せざるをえない。

このような状況下ではあるが、特にベナーに研究対象を絞った積極的理由もある。それは、以下の4つの理由による。

まず、一つは、ベナーが現象学の影響を受け、現象学的アプローチの立場を明白にしているからである。以下に詳しく分析検討していくが、ベナーは著書の中で現象学の解釈を看護に取り入れていることをはっきりと記述している。第2の理由としては、ベナーが取り入れている現象学の考え方そのものにある。

上述したように、現在、現象学的解釈をしている看護理論、看護実践報告は多数にわたる。しかし、これらの現象学は、ジオルジ、パースティ、コレイジィ等である。彼らは現象学的視点の持ち主であるが、それは、千田の表現を借りれば拡散し、離散した時点での現象学である。<sup>(4)</sup> 現象学はフッサールをその始祖とする。そして、そこにハイデガー、メルロポンティにつながる流れがある。その点で、現象学が拡散、分離する以前での現象学的解釈を取り入れていることで、その考え方がわりやすく、また問題的にもわかりやすいということがあげられる。第3の理由としては、異分野の考え方を取り入れていることがあげられる。ベナーは独自の看護理論を展開させているが、そこにはドレフィス理論と呼ばれる全く異分野の考え方を取り入れている。ドレフィス理論とは、もともとパイロットなどが、どのようにその技術を上達させていくかという視点をみたものである。<sup>(5)</sup> これは本論考が看護理論という保育とは異分野の考え方を保育現場に取り入れようという試みには、たいへん有意義であると考えられる。第4の理由としては、ケア理論にも正面から取り組んでいる点が上げられる。保育と看護の普遍的概念として「ケア」という概念が考えられる。

このケア理論に正面から取り組んでいるベナー理論は本論考においては取り上げる価値があると考えられるからである。

### 3. ベナーの現象学的立場

#### (1) 現象学の現状

本項ではベナーの現象学的立場について考察する。その前に、もう一度、現象学が現状でどういう状態であるかについて考察する。まずはその一般的定義である。

本書において述べる現象学 (phenomenologie

〈独〉phenomenology〈米〉phenomenologie〈仏〉は、20世紀初頭に独逸の哲学者エイトムント・フッサール(Edmund Husserl, 1859.1938)によって創設された運動(現象学運動)をさす。それは19世紀末から20世紀はじめにかけて多くの需要、批判、対決、分岐、統合を経ながら、今日にいたるまでひとつの中心として現代の哲学・思想において生命力を保っている。<sup>(6)</sup>

さらに拡散、分離していることが前提で現象学の基本的態度として現象学は「とても広い裾野をもつ哲学・思想運動である。」<sup>(7)</sup>とされている。

その場合、いったい「現象学」ということでどのような共通の統一的な基本思想が意味されているのか、そしてそこからどのように遠心的に拡大され、さらにそれが再び基本思想に影響し返すのか。<sup>(8)</sup>

という問いが出され、その問いに対して実際のところ、それぞれの著者が現象学ということは何を意味しているのかは、必ずしも同一ではありません。しかし多くの著書に通底する学問理念は、われわれ自身の「経験」や「体験」という源に出発点を取り、そこから現れてくる当の、そのことです。現象学をつらぬく縦糸は、そもそも始まりから、学派としての体系ではなく、このような「共通の確信」に他なりません。そして、が、現象学のもっとも基本的な態度となります。<sup>(9)</sup>と応えている。

上記は示唆を含む記述である。「実際のところ、それぞれの著者が現象学ということは何を意味しているのかは、必ずしも同一ではありません。」と記されている。これでは、「現象学的アプローチ」と提言してみても解釈が不一致となってしまう。また、このような状況に対する千田の提言は、「共通の確信」として、「問題としていることがら(事象)がもつ道理を、先入見や思い込みや権威や伝統や外側から作られた理論や言説にとらわれることなく、あるいはそれらの強い支配に抗しながら、露わにしていくこと」であると、さらに、その基本的態度とは、「たんに顕在的に明確に見えている側面だけではなく、重層的に潜在する隠れた幾重もの層をも意識化することによって、自己自身の経験や体験をその全体的なあるまじりをもつものとして明るみに出そうとすること」である。これは確かに現象学の基本的態度であるには違いないが、これでは実践を解釈するには、あまりにもおおざっぱであり、解釈が統一できない。そこで前項にあげた理由でベナーの現象学を分析検討するのである。

## (2) ベナーの現象学的立場

ベナーは自分の現象学的立場を明確に宣言している。

本書はマルティン・ハイデガーとモーリス・メルローポンティの著作に基づいた現象学の立場をとり、人の生きぬく体験としての健康と病気に照準を合わせる。健康であることと病気であることは、ここではそれぞれ人間の世界内存在の特定の様式として理解される、この世界-内-存在というのは、ハイデガーとメルローポンティによれば、反省的思考に先立つ人間の基本的なあり方のことである、人がいかなる条件の下で治療を求め、援助を受けられるかは、その人がこうした反省以前の次元で病気と健康をそのように体験しているかによって決まってくる。ケスタンボームによれば、現象学とはひとつの思考スタイルである。<sup>(10)</sup>

さらに続けて次のように挑戦的に宣言もしている。

心身二元論に、私たちは現象学的な観方で対抗しようと思う<sup>(11)</sup>

これは極めて明確な立場であると言えよう。心身二元論とは言うまでもなくデカルト以来の二元論に対しての対立の立場を鮮明にしたものであり、さらに看護における当然の了解事項であるかのように以下のように続ける。

現在、看護理論家は、こうした原子論的な人間観と機械論的な人間観に意義申し立てするのが通例である。<sup>(12)</sup>

ここにおいてベナーの現象学的な立場はベナーの宣言とともに明らかになる。それはハイデガーのいう世界内存在としての人間という立場である。以下にベナーの発言の引用とともに考察していく。

### (3) ベナー現象学の重要概念 心身一元論

上述のようにベナーは心身二元論に対抗する手段として現象学を用いることを宣言している。以下この概念を検討していく。

まず、ベナーのとらえている状況を下記の記述より伺うことができる。

心と身体が相互に関係し合っていて、それらの間の影響が共働的かつ双方向的であるという点については、今日ほとんどの人が同意している。しかし心身二元論に毒された言葉づかいはいまだいたるところに見られ、例えば「主観的」症状と「客観的」症状が区別されるところにそれは明らかである。<sup>(13)</sup>

ベナーの主張するように今日、心と身体とを完全に分離して考える人間は少ないであろう。心に悩みがあれば胃が痛くなるなど言うのはもはや日常用語にさ

えなり、常識として定着しつつある。しかし、ベナーはそのような常識にまでなりつつある心身一元論に対して、いまだ根強く残る心身二元論に警告を発している。それが「主観」と「客観」という解釈である。今日でも、たとえば熱がないのに仕事を休めば「たるんでいる。」と叱責される光景も珍しくないだろう。ベナーはそういう事実に対して強い警告を出しているのである。それは以下のような発言に出ている。

心と身体が分離独立した実体と捉えられる時、ストレスは他人には近づけぬ主観的体験と見なされる。この観方によれば、痛手となる同じ出来事に遭遇しても、それを脅威と考える人もいれば、幸運と考える人もいておかしくない。いずれにせよ「考え方」の違いにすぎない、ということになる。人々の間に共有される意味があることは見落とされ、私的な主観が「ストレスを生み出したのはあなた自身だ」と責任を負わされ、「考え方次第でどうにでもなるのだから」と自己管理を求められる。自由は「肉体に打ち勝つ精神力の自由」という私的で主観的な自由を意味するようになる。したがってここでは誰であれ「ストレス」を抱えている人は、「あなたは正しい精神態度をとっていなかったのだ」と非難されることになりかねない。これはストレスと対処を扱う研究者のよく陥る落とし穴で、「苦しんでいるのは本人の責任だ」と見る立場である。<sup>(14)</sup>

ストレスのような目に見えない病気は、本人の気持ちのせいであると解釈される現状があり、それを批判しているのである。そこには一方で、すさまじい勢いで進む医療の近代化に対する警鐘もある。熱がない、レントゲンで異常がない、スキャナーで異常がない、あらゆる検査で異常がない。そういう状態になれば、現代の医療では本人がどんなに苦しんでいても、「異常ありません。」と診断されてしまう。もしくは上述のように「苦しんでいるのは本人の責任だ」という判断をされかねない。

そのような状況を批判しているのである。「熱がない、レントゲンで異常がない、スキャナーで以上がない、あらゆる検査で異常がない。」というのは機械化された判断、そしてそれは現代医学、現代科学では客観的判断ということになる。そして「痛い」「苦しい」「だるい」というのは本人の主観ということになる。ここにおいて現代医療では、主観よりも客観が重視される。これを現象学的立場で強く批判しているのである。さらに、この解釈は以下のような記述へと続く。

看護婦から見て明らかに古びた対処の様式も、患者の身にとっては、ひとつの世界ない存在様式としてまったく自明なものとなっているかもしれない

いのである。<sup>(15)</sup>

ここにおいてベナーの主張はあきらかな近代医療への批判ともなる。

たとえば、咳が出て止まらない患者がいる。しかしレントゲンで異常がない。すると医者は、「レントゲンでは異常がないので大丈夫です。お帰り下さい。」などという展開となる可能性が高い。本人が咳が出て止まらずに苦しんでいるにも関わらず、レントゲンでは異常がない、と診・断される。そういう場合—近代医療に頼りきっている現代の医療従事者よりも、ネギを喉に当てればいい、とか、ニンニクを塗るといい等の伝統的、習慣的手段が有効となる場合がある。

つまり、近代医療に頼り切っていると、近代医療では明らかにできない部分が切り落とされていく。心とはその最たるものである。

科学にとって心というのはある種疑わしい存在であるから（つまり客観的な用語で同定できないから）、その現実性は割り引いて考えられ、結果的に人格の現実性も同じ扱いを受けることになる。したがって心身二元論が受け容れられている限り、苦しみは主観的なものに過ぎず、「現実的」ではない。つまり医学の領域には属しないとされるか、もっぱら苦痛と同一視されるか、いずれかである。そうした考え方は、病気の患者を物扱い、している点で危険で誤っているだけでなく、それ自体で苦しみの源である。<sup>(16)</sup>

そして、その解釈は、状況内の判断へと続く。

看護婦が患者の力になれる（可能なら患者を回復に導ける）のは、患者にとって病気がいかなる意味を持っているかを把握し、その理解を自らの実践の中に活かしていくことによってである。<sup>(17)</sup>

しかし、

心身二元論から、身体は医学に割り振り、人格は医学のカテゴリーに入れられない、という帰結が生じるとすれば、人格にとって残された唯一の場所は心というカテゴリーになる。<sup>(18)</sup>

つまり、看護婦が患者の力になれるのは相手の文脈に入り混むこと。

状況に入り込むことによって可能であることを告げる。この考えは以下の現象学における世界内存在という解釈へと続く。

#### (4) 世界内存在

まず、ベナーは世界内存在としての立場を明白にする。

人が人であるとは、何らかの意味を〔世界を分節する様式として〕携えて生きるということに他ならず、何が人の関心ないし問題意識の対象になる

かはそうした意味によって自らのありようを規定されるということに他ならない。人間に特定の生き方の可能性が開けてくるのは、〈人間が意味上の際立ちを具えた世界〉に参与していればこそなのである。意味は単に事物や出来事を指示するだけでなく、ものの観方・感情の持ち方・状況との関わり方に新しい選択肢をつくり出しもするのである。<sup>(19)</sup>

ベナーの現象学的考えは首尾一貫している。それはつまりはナラティブということである。ここにおいて完全にハイデガーの影響を受けていることを明らかにしている。

実際には苦しみは病気体験の一部であり、人間的な〈意味の世界〉の一部である。本書で私たちがとる考え方によれば、意味には記述的 (descriptive) 機能〔何かを描写する機能〕の他に、構成的 (constitutive) 機能〔人間の世界への関わり方を形づくる機能〕がある。人が人であるとは、何らかの意味を〔世界を分節する様式として〕携えて生きるということに他ならず、何が人の関心ないし問題意識の対象になるかはそうした意味によって決まる。<sup>(20)</sup>

上記のごとく、ベナーは一貫してデカルト的なもの見方を否定し、終始、世界内存在に内にいる。

現象学的な観方の下では

人間はいかなる状況に置かれようと、己れにとってのその意味を常に任意に選択できる、という近代的な考え方を指す。<sup>(21)</sup>

とし、さらに

人間は共通の意味をともに担う者と見なされる。身体を生き抜くという体験の共通性と合わせて、意味の共有というこの事実があるからこそ、人間は互いの考えを伝え合い、理解し合うことができる。

現象学的に人間を心身の統合された存在と捉える時、我々の人間理解は改められ、人間は〈意味上の際立ちを具えた世界〉に参与している存在とみなされることになる。私たちはこの参与を状況けられた自由 (situated freedom) と表現する。<sup>(22)</sup>

としている。

哲学においても、そして医療においても重要であるところの概念である「自由」についての解釈において、つまりはナラティブなのである。

デカルト的な完全な自由を否定し、状況の中に生きる自由を示唆している。

状況づけられた自由という考え方は臨床家にとって重要な意味合いを持つ。この考え方をとる時、人間の行為は必ずしも本人が自由に選択したもの

とは見なされなくなるからである。この観方によれば、人間は原理的に自由でも、原理的に不自由でもない。

人は自分固有の一連の意味・習慣・ものの観方を携えて状況に入っていく。そしてその状況にその人がどのように身を置かかに応じて、行為の特定の方向と特定の可能性が開けてくる。状況の変化に応じて新しい可能性を見出していくことも、もちろん可能だが、それらはあくまでそれまでの習慣・技能、活動様式、予期能力を背景にしてのみ見出され、選択肢に組み込まれる。〈意味上の際立ちを具えた世界〉に生きるとはそういうことである。<sup>(23)</sup>

#### (5) ベナー理論とは

以上諺みてきたようにベナー理論は文字通り現象学的アプローチであり、その特徴はデカルトの心身二元論を否定し、ハイデガーのいうところの世界内存在を主張するのである。そこでは主観と客観の問題は考慮され、また、ナラティブとしての人は文脈の中で生活し状況の中で自由を得る。それがベナーの立場である。

ただ、このようなベナー理論のハイデッガー哲学の引用には注意が必要だという指摘がある。ベナーはその看護理論においてハイデガーの影響を全面に出し、そしてハイデガーの概念をそのまま当てはめている。たとえば、ケア概念などは、そのままハイデガーの言葉を用いている。しかし、哲学概念としてのケアと看護概念としてのケアは異なり、そこに批判もある。

哲学者である中岡成文からは以下の批判がある。

P ベナーをはじめとする多くの看護学研究者がやっているように、ハイデガーを無造作に看護学の文脈に持ち込むこと、とくに彼の「気遣い」(ゾルゲ) 論をそのままケア論と捉えることには問題がないわけではない。それは次の理由による。

『存在と時間』は「本来的な実存」を浮き彫りにしようとしており、それは人間が「死への存在」であることの自覚からのみ出てくるとれる。ということは、その自覚を持たない、私たちの「日常的」、「平均的」な生き方はネガティブに見られているということである。「気遣い」とは一ハイデガーの用語では「存在的」な次元で一憂診であり、しがらみ、煩悩でもある。つまり、ひと(たとえば患者さん)ができたならそこから自由になるべしがらみである。「気遣い」とケア(この場合はニードと読み替える)が比較可能だとして、ケア(ニード)の中には一種の迷い、幻想であるものも含まれるのだろうか。<sup>(24)</sup>

つまり、中岡からの批判的警告は以下の二点である。

一つは、ハイデガーの「存在と時間」における気遣いの概念とは、人間が死へ存在という限られた側面である。そしてもう一つは、現存在を単純に人間と置き換えていることへの疑問である。そもそもハイデガーは気遣いを2つに分類している。一つが配慮であり、もう一つは頭慮である。<sup>(25)</sup>そしてそこには、人間は現存在としての特別な存在者であるという明確な区別も存在している。ベナーの引用については、その明確な基準が曖昧であることは否定できない。そこが純然たる哲学者からの批判を受けているのであろう。

### 第3章 保育学への適用

#### 第1節 概要第1節 なぜ、保育への適用なのか

前章までにおいて、看護理論の中の現象学的アプローチの方法を検討した。第5章においては、この現象学的アプローチを保育学へ適用したい。しかし、ここではその適用の前提として、実践の科学としての共通の枠組みを探ってみたい。

まずは、看護学から、次のような問題の報告がある。

看護学研究の方は科学主義批判をすごく口にされました。ところが、科学主義を批判する研究者の方々がもう一方には別の焦りをもっていらして、看護学は科学として、あるいは学問としてどうして成立しうるのかという問いを抱え込んでいらっしやいました。つまり、単なる総合科学ではなしに、看護学には看護学の原理が、あるいは方法があるはずだ、そうでなければ学問として独立できない。

そしてまた、科学主義的な客観性ではないけれども、主観的な信念ではなくて、なんらかの客観的な方法とかデータなどで看護学固有のものが成り立たなければ、サイエンスにならないのではないか、というものです。つまり、科学主義を批判しながら、科学として客観的でなければならないという要請を自ら課すというジレンマの中で苦しんでおられたのが、いまもありありと思い出されま<sup>(26)</sup>す。

この看護学の苦しみ、それは、保育にもそのままあてはまる。保育学の方からは以下のような報告がある。

このことは事象をとらえるとき、できるかぎり共通な立場で認識できるものを事実と認定し、事実と事実との間にみられる関係性（因果関係も含めて）をとらえようとし、それに対し「理論」という言葉をあてはめ、主観的で個人的な「情緒や先

入観が入り込みそうな言葉をできるだけ排除する努力をしてきた。・・・(中略)・・・その結果、比喩語に代表されるような主観性が強く、感「情移入しやすく、客観的に共通認識されにくいと思われる言語は「理論」言語として排除してきた。一方、保育現場で幼児一人ひとりと交流する中で生活している保育者にとって必要な言葉は、「理論」言語とは異質のものである。「幼児の目が輝いていた」と云った比喩性の高い言葉である。保育研究者が保育の現実を保育者と同じ立場でとらえようとすれば（これをここで当事者性とよぶことにする）、比喩製の高い言葉を使わざるをえない。ここに保育研究者の矛盾と課題性がある。<sup>(27)</sup>

看護学研究者が抱えるジレンマ。保育研究者が抱える矛盾。ここには、実践科学としての共通の悩みが存在するのである。それは一言で言えば、科学主義に対するコンプレックスというか、科学主義からの脅迫観念である。両者とも現場を抱えているのであるから、日々、現場からの報告が入る。それはたとえば保育の分野においては小川の指摘するように、「理論」言語とは異質のものである。「幼児の目が輝いていた」といった比喩性の高い言葉が入ってきてしまう。また、看護学の分野からは、外界の刺激に反応しないと定義づけられている植物状態患者との会話する看護婦の報告が届けられる。

看護学研究者は「なんらかの客観的な方法とかデータなどで看護学固有のものが成り立たなければ、サイエンスにならないのではないかと」苦しみ、主観ではない客観的なデータをほしが<sup>(27)</sup>る。保育学者は、主観的で個人的な情緒や先入観が入り込みそうな言葉をできるだけ排除する努力をし続ける。

では、なぜ、そうなるのか。それは現場において看護婦が接する相手、保育者が接する相手が必ずしも、小川の言う、「理論言語」を用いないからである。小川の言うように、保育現場で幼児一人ひとりと交流する中で生活している保育者にとって必要な言葉は、「理論」言語とは異質のものである。また、外界の刺激に反応しない植物状態患者は、言語そのものを発しないし、受け付け<sup>(27)</sup>ない。そこに科学主義を否定しながら科学主義を求める矛盾が生じる。この苦しみと検討課題が交差する。

小川は、

このことは事象をとらえるとき、できるかぎり共通な立場で認識できるものを事実と認定し、事実と事実との間にみられる関係性（因果関係も含めて）をとらえようとし、それに対し「理論」という言葉をあてはめ、主観的で個人的な情緒や先入観が入り込みそうな言葉をできるだけ排除する努

力をしてきた。<sup>(28)</sup>  
と述べている。

しかし、これは、本来、理論的に会話をしない幼児  
に対してのアプローチをする点で、小川自身も認めて  
いるようにそもそも矛盾に満ちている。看護が科学的  
アプローチにこだわることへの内省から、現在第2章  
において見たように、自然科学的アプローチに変わる  
新しい方法として現象学的アプローチを試みている。  
保育学もこのアプローチを適用してみる価値はあると  
考えられる。

そこで、現象学的アプローチを用いて、この小川の  
論文を再度、検討する。

まず、再度、引用する小川のアプローチ方法であ  
る。

事象をとらえるとき、できるかぎり共通な立場で  
認識できるものを事実と認定し、事実と事実との  
間にみられる関係性（因果関係も含めて）をとら  
えようとし、それに対し「理論」という言葉をあ  
てはめ、主観的で個人的な情緒や先入観が入り込  
みそうな言葉をできるだけ排除する努力をしてき  
た。

その結果、比喩語に代表されるような主観性が高  
く、感情移入しやすく、客観的に共通認識されに  
くと思われる言語は「理論」言語として排除し  
てきた。<sup>(29)</sup>

上記は明らかに自然科学的アプローチである。こ  
れが現象学的アプローチになるとどのような点が問  
題になるか。

まず、「事実」が異なってくる。上記で小川はさほ  
ど問題なく、当然のように「事実」という言葉を用い  
ている。これは、哲学的視点からは、素朴実在論に属  
する。しかし、現象学的アプローチにおいては、そも  
そもこの事実が異なっている。これは西村の植物状態  
患者へのアプローチを念頭におけばはっきりわかる。  
彼女が外界からの刺激に一切反応しない植物状態患者  
に自然科学的アプローチを種々試みて、それがことご  
とく失敗したあとに取った方法は、医学で定められた  
植物状態患者への定義そのものを変更することであ  
った。

意識の徴候が認められず、他者との関係をもつこ  
とが不可能という植物状態患者の定義に縛られて  
いては話が進まない。ここから先に進むにはどう  
しても、既存の植物状態患者の定義を乗り越える  
視点が必要となった。<sup>(30)</sup>

つまり、「植物状態患者への定義」という事実そのも  
のが変わったのである。先に小川は以下のように記し  
ている。

保育現場で幼児一人ひとりと交流する中で生活し

ている保育者にとって必要な言葉は、「理論」言  
語とは異質のものである。「幼児の目が輝いてい  
た」と云った比喩性の高い言葉である。保育研究  
者が保育の現実を保育者と同じ立場でとらえよう  
とすれば（これをここで当事者性とよぶことにす  
る）、比喩製の高い言葉を使わざるをえない。こ  
こに保育研究者の矛盾と課題性がある。<sup>(31)</sup>

小川の記述は、自然科学的アプローチに「慣れてしま  
い、自然科学的万能の世界で生活している私たちには  
たいへんわかりやすいとも言える。しかし、それは現  
象学的なアプローチをした場合、事実であろうか。「幼  
児の目が輝いている」という保育者の発言は比喩性  
の高い言葉なのであろうか。ここに、また西村の分析を  
交差する。

現象学の次のような考え方が、看護婦たちの経  
験を「思い込み」ではなく、ある確かな事実へと  
押し上げてくれる。現象学では、知覚された経験  
を、それ自体として存在するものではなく、それ  
を思ったり感じたりする人間の側の思考との関係  
の中で現象すること、として捉える。知覚経験で  
は、関係が第一義的であり、関係の両項である知  
覚する主体と対象の存在は、関係の成立を前提と  
しているという意味で第二次的なものである関係  
によって現象する経験は、つねに解釈によって更  
新され、新たな意味として生成し続けるものと考  
えられている。<sup>(32)</sup>

つまり、現象学的アプローチでは、「幼児の目が輝い  
ている」というのは保育者の思いこみではなく、ある  
確かな事実なのである。

保育に現象学的アプローチを入れるということは、以  
上のようなことを指すのである。

### 第3節 今後の展開

#### 1. 保育における現象学的アプローチ

これまで、保育に対しての現象学的なアプローチが  
全くなかったわけでない。村井による専門性に関する  
研究はその一つである。村井は、ヴァンマーネンの  
保育実践に注目し、その実践を (a) 子どもとともに  
実際に経験し、生活すること、(b) そういった経験  
について反省的に（回顧的に）語ったり記述したりす  
ることの二つに区別して考えることを示した。<sup>(33)</sup> そ  
して、この語り、記述に対して以下のように述べる。

しかも、経験をできる限り「現に在るがままに」  
書くという現象学的な記述においては、われわれ  
は、まずもって自らの先入見を排除し、因果論に  
よる経験意味づけを避けなければならない。<sup>(34)</sup>

このように現象学的な記述の必要性について述べた  
あと、タクトとのかねあいで以下のように結論づけ

る。

さらに、「タクト豊かな」振る舞いは、生来の才能ではなく、また、保育者としての経験年数に応じて自動的に身につくものでもなく、同僚との話し合いを通じた反省（省察）、さらに先入見を排除した現象学的な記述によって慣用されていくものと言えるこのことは、保育者の養成の場、さらに現職保育者の研修の場における、教育的な契機に関する現象学的な記述の重要性を示すものである。今後現象学的な記述のあり方に関してさらに検討を進めていきたい。<sup>(35)</sup>

このように、保育においても、現象学的アプローチの意義が認められていないわけではない。しかし、本論文の第3章において考察したように、看護における現象学的アプローチに比べると、決して盛んとは言えない。その理由はなんであろうから保育が現象学的アプローチに向かないからであろうか。いや、私はその反対だと考える。保育という行為があまりにも現象学的であるがために、保育者は現象学を意識せず、保育行為への接近ができるのである。たとえば、現象学者のヴィッテンベルグはナイチンゲールを現象学者と呼んでいる。<sup>(36)</sup> ナイチンゲールのほぼ全著作を通じて、ナイチンゲールが自らを「現象学者」と認めている記述は一つもない6にもかかわらず、ヴィッテンベルグは、彼女の著作が現象学であることを認めているわけである。それと同じ行為として上記の「保育行為は現象学的である」という仮説が成り立つ。以下のその仮説について検証する。この仮説の検証に、J・ギブソンのアフォーダンス理論と同じくアフォーダンス論者のE S・リードのアフォーダンスの心理学を用いる。

そもそも、アフォーダンスは「アフォード（提供する）」という動詞の造語である6環境がさまざまな情報を人間を含めた有機体に与えてくれるという意味では、アフォーダンスは生態学的（エコロジカル）な実存論である。そして、その情報は有機体によってピックアップされなければ意味をなさない。<sup>(37)</sup>

例をあげるならば、

木は子どもには木登りを、老人には木陰での安らぎを、難民には燃料をアフォードしてくれる。けれど、ある子どもには木陰での安らぎを、ある老人には燃料を、ある難民には木登りをアフォードしてくれる<sup>(38)</sup>

ということになる。要するに、知覚は、環境が与えてくれる固定的・客観的な結果ではなくて、それぞれの人間が環境と交渉して引き出してくる情報であり、価値なのである。だから私たちの知覚や行動は、多くの場合、そのつど工夫されたり、偶然に発見されたりしたもの、言い換えると「創発的」なものである。<sup>(39)</sup>

これは、保育における環境構成の視点と重なる。たとえば、積み木を例にあげるならば、

積み木は幼児にとって興味の対象である可能性が強い。だから今、そこにだれも遊んでいなくても、積み木は幼児の関心を引きつける媒体としてそこに存在することになる。つまり環境構成として積み木のある場所に置くという行為は、幼児の中に潜在的にあるいは顕在的にある積み木への興味を誘発する要因をそこに設定することを意味している。しかも、その行為には保育者の願いも、したがって教育目標も間接的に表現されている。<sup>(40)</sup>

ここにおいて、保育学が幼児を対象としていることが大きな意味を持つ。

これには、幼児の認知レベルと関係がある。

リードによれば、子どもはあるアフォーダンスの実現のための自律的一能力をもつ前から、大人に促進され、それに動機づけられて、いわば見切り発車でその行為の学習を開始するという。危なっかしい足取りで歩いたり、本を顔の前に捧げて読み上げるふりをしたり、ボールからとんでもなく離れたところでバットを振ったりする。子供は歩行、読書、野球についてしっかりとしたイメージを持っているわけではないが、見よう見まねでそれらの文化的枠組みに身体をとけ込ませていく。リードはそれを「充たされざる意味」の「早熟な知覚」と呼び、子どもは「知ることなく知る」のだとも述べている<sup>(41)</sup>

この「早熟な知覚」にしても保育では「見てまねる」という研究課題にすでになっている。<sup>(42)</sup> そして、それは、幼児の環境への関わりという指摘にもつながる。

とくに、まだ文化的慣習を身に着けていない小さな子供は、環境と格闘し、とまどいながら、近くや活動のパターンを手探りで試用し、少しずつ確立していかざるをえない。動物の一員として、子供は移動しながらさまざまなものに会う。動物はもっとも明確な反応（触ろうとして手を出すと吠えつく）を示すが、植物だって、無生物だって、子供にはさまざまな顔を見せてくれる。<sup>(43)</sup>

無生物との対話。これは自然科学のアプローチではありえない視点であろう。自然科学的アプローチでは、人間は無生物であるモノとは会話できない。しかし、保育行為としては、幼児はモノと会話できる。それは看護において看護婦が植物状態患者と会話できるのと同じである。このような考えは保育のあり方にも新しい視点をおくるであろう。保育研究からの報告に、幼児とモノとの関わりを扱ったもののがかなりある。ごっこ遊び、みたて遊びとう保育研究における大

きな研究課題となっている。これなどは、幼児とモノとの関わりではなく、幼児とモノとの会話とも解釈できる。大人同士が街中で井戸端会議をするように、幼児は園の中において、モノと会話する。モノとお話をする。という解釈をする。

こういう視点をを用いることで幼児とモノとの関わりに対する見方も変わるであろう。たとえば、飽きずに長時間、ひとつのモノで遊んでいる幼児がいる。こういう保育行為に対して、幼児の集中力というような見方ではなく、幼児のモノのおしゃくりと解釈することが可能となる。おしゃべりであれば、相手であるモノがお話上手であれば飽きずにお話を続けることができるであろう。

また、現象学的アプローチではナラティブ・ベイスド・メディスンが注目を浴びている、これなども幼児の表現活動との共通項も多い。

このように見てくると、先にヴィットゲンベルグがナイチンゲールを現象学者と呼んだように、保育行為を現象学であると呼んでも差し支えはないと考えられる。ナイチンゲール自身が自分を現象学者と呼んだことがないと同様に、保育者がその自覚を持たなくても、保育行為が現象学であると言っても差し支えないと考えられる。

### III 結論

保育と看護には共通の援助概念が存在するが、その橋渡しとなるのが、哲学的なアプローチであることが結論づけられた。これは、保育、看護が実践の科学、であることを考えると、意外な印象を受けるかもしれない。そこには、現象学のように極めて広いテリトリーを覆う、哲学が存在することが大だった。しかし、反面、論考でも記述したように、各人がそれぞれの用い方、解釈をとっているのも現状である。今後は、その解釈にも一定の共通項を確立することが必要となる。

#### 〔引用文献〕

- (1) 西村ユミ 語りかける身俵 看護ケアの現象学 ゆみる出版2001
- (2) 立花隆 脳死 中央公論社 1986
- (3) 鷺田精一 看護学と哲学をつなぐもの 看護研究 37巻5号2004年 増刊号 p、40
- (4) 千田義光 現象学の基礎 日本放送出版協会 2004 p.4
- (5) ドレフェイス著 椋田直子訳 純粋人口知能批判 アスキー出版局 1987
- (6) 経緯に関しては、「黒田裕子監修：看護理論 旧総研 2004年11月19日、「城ヶ端初子監修：N C ブックス 看護理論 医学芸術社 2005年6月」、「城ヶ端初子監修：実践に生かす看護理論 19 医学芸術社2005年3月」を参考にして
- (7) 千田義光 (2004) 現象学の基礎 放送大学 諺
- (8) 千田義光 (2004) 現象学の基礎 放送大学 諺
- (9) 同上 p.4  
同上 p.4
- (10) 難波卓志訳『現象学的人間論と看護』医学書院 P9
- (11) 同上 p.28
- (12) 同上 p.8
- (13) 同上 p.22
- (14) 同上 p.28
- (15) 同上 p.29
- (16) 同上 p.27
- (17) 同上 p.27
- (18) 同上 p.27
- (19) 同上 p.27
- (20) 同上 p.27
- (21) 同上 p.28
- (22) 同上 p.61
- (23) 同上 p.29
- (24) 中岡成文 ケアする欲求、欲求するケア メタフェシカ30号
- (25) ハイデガー著 桑木務訳 存在と時間 岩波文庫 岩波書店 1965年 26章
- (26) 鷺田清一 看護学と哲学をつなぐもの 看護研究 Vol.37 No.5 2004 p.4
- (27) 小川博久 倉橋惣三の保育：理論研究 日本女子大学紀要 家政学部 第49号 2002年 p.43.44  
西村ユミ 看護ケアの現象学 ゆみる出版 2001 p.3
- (28) (2) に同じ
- (29) 小川博久：倉橋惣三の保育理論研究 日本女子大学紀要 家政学部 第49号 2002年 p.44
- (30) 西村ユミ 看護ケアの現象学 ゆみる出版 200 p.39
- (31) 同上 p.39
- (32) 同上 p.42
- (33) 村井尚子 保育者における専門性としてのタクとその要請に関する一考察 保育学研究 第39巻第1号2001年 p.49
- (34) 同上 p.49
- (35) 同上 P.50
- (36) ヴァン・デン・ベルク 早坂奏次郎著 現象学

- への招待 川島書店 1990年9月 p.77
- (37) 中岡成文 臨床的理性批判岩波書店 2001年10  
月 p.10
- (38) 同上 p.10
- (39) 同上 p.11
- (40) 小川博久 保育援助論 生活ジャーナル 2000  
年 p.50
- (41) 申岡成交：臨床的理性批判岩波書店 2001年10  
月 p.21
- (42) 小川博久 保育援助論 生活ジャーナル 2000  
年 p.59
- (43) 申岡戒交易臨床的理性批判岩波書店 20, 年10  
月 p.10